

# 新発生害虫イチジクヒトリモドキについて

イチジクヒトリモドキ（写真1）は、平成11年9月に伊予郡松前町で初めて発生が確認されたイチジクの害虫であり、平成12年に引き続き平成13年も成虫と幼虫の発生が確認されたことから愛媛県に定着したと考えられる。



写真1 イチジクヒトリモドキ成虫  
（左がオス、右がメス）

イチジクヒトリモドキの若齢幼虫は、群生して葉裏から表皮を残すように食害する（写真2）ため網目状の食害痕となる。中齢以降の幼虫は、太い葉脈を残して葉を食い尽くすため、うちわの骨を残した様な被害になる（写真3）。特に多発した場合は樹全体の葉が食い尽くされることもあるが、果実の食害はあまり見られない。イチジク以外でも野生のイヌビワなどを食害する。越冬は、土中で蛹の状態で行う。

イチジクヒトリモドキを温度別に飼育した結果から年間の発生回数を推測すると、5月上旬から成虫が見られはじめ以後4世代発生するとみられる。

幼虫の加害は激しく、被害を受けるとかなりの減収が予想されるので、多発生園では防



写真2 イチジクヒトリモドキ若齢幼虫の食害状況



写真3 イチジクヒトリモドキ老齢幼虫の食害状況

除が必要である。野外での発生消長と被害の調査から、8月以降の被害が激しいので、7月中旬の第2世代幼虫期までの防除を徹底する必要がある。若齢幼虫は群集する性質があるので、分散前の薬剤防除が最も効果的であり、この時期に寄生葉を取り除いて処分することも大事である。

本種に対するイチジクでの登録薬剤はないが、スリップス類に登録のあるアディオンの乳剤2,000倍、スカウトフロアブル2,000倍で同時防除が可能である（表1）。

表1 イチジクヒトリモドキ幼虫に対する各種薬剤の防除効果(2000)

薬剤名	倍数	幼虫 齢期	3日後の割合(%)	
			死亡	生存
アディオ ン乳剤	2,000	老齢	100	0
		若齢	100	0
スカウ トフロ アブル	2,000	老齢	100	0
		若齢	100	0
無処理		老齢	0	100
		若齢	0	100

(注) 虫体及び食餌浸漬法で行った。老齢、若齢各一薬剤あたり30頭前後を供試した。

(虫害班 研究員 中田孝江)

編集発行 愛媛県立果樹試験場  
〒791-0112  
松山市下伊台町1618  
TEL 089-977-2100  
FAX 089-977-2451